

“私が境界性パーソナリティ障害になるとき”

——「パーソナリティ」の単一性から、「ハビトゥス」の複数性へ——

慶応義塾大学／日本学術振興会 澤田唯人

1. 背景と目的

高度な感情管理が日常的に要請される「感情管理化社会」の趨勢は、それが高まれば高まるほど、「感情管理」能力の劣る者を医療化していく、という逆説を孕んでいる（澤田 2014）。そして、まさにこの動向を象徴する存在として、近年臨床の場で急増が指摘される「境界性パーソナリティ障害（Borderline Personality Disorder : BPD）」を考えることができる。いわゆる『DSM』によれば、BPDとは「不安定な自己 - 他者イメージ」、「見捨てられ不安や不適切な怒り」の制御困難などの診断基準から構成される。その増加の背景には、感情管理化だけでなく、再帰的近代化に伴う「存在論的不安」、さらには社会の流動化による発達段階における「境界期」の存在を指摘することもできる。だが、このようなマクロな社会認識だけをもって、「境界性パーソナリティ障害」を説明することは、“ほかならぬ私が、なぜ今ここで、こうしてしまうのか”という当事者の苦しみへの理解を拓くことはない。本報告の目的は、以上の問題意識のもと、『複数の人間』（Lahire 1998=2013）において「個人の社会学」を打ちだしたB・ライールの議論から、従来の「パーソナリティ障害」論を再考し、当事者が生きる感情的行為の意味を探ることにある。

2. 課題と方法

P・ブルデューは、行為者が「単一の階級文化」を背景にした「単一のハビトゥス」を身につけることを論じた。これに対し、ライールは、社会化の場が多様化している現代社会では、行為者は「複数の」文化的な場で、「複数の」文化的性向を身体化しており、個人の行為は、そのつどの「文脈（場）」と身体化された複数の「性向」との組み合わせに応じて現働化されるのだと述べる。つまり、私たちは、その身が置かれる「場」（家庭・学校・職場など）によって、そのつど適合的な「性向」を前反省的に現働化することで日々の行為を組織化しているのである。したがってライールによれば、個人の振る舞いとは「単一的な」人格や性向、性格の問題としてではなく、そのつどの「場と性向との関係性」から論じ直されるべきだという。本報告では、この点が「境界性パーソナリティ障害」当事者の語りの中にも具体的に示されていること、さらにはライールの議論を越えて、逸脱的だとみなされる当事者の感情的行為が、「実践的類推」に基づくハビトゥスの移調可能性をめぐる困難とその克服として体現されている可能性を検討する。

3. 結果と結論

従来のBPDをめぐる医学的言説は、個人の人格の「単一性」を前提とすることで、対人関係的な問題を「個人のパーソナリティ」の病理として説明してきた。そこには、「自己」とは一貫性や単一性を有するものだという近代特有の認識が反映されている。しかし、「私はいつでもBPDじゃない」、「あるときBPDっぽくなる」といった語りの存在が示すように、人格の病理として論じられてきた問題は、場と性向とのそのつどの適合性から記述し直されうる。また、そこで体現される感情的行為は、「実践的類推（なぞらえ）」がうまく機能しない場面にあって、新たな「なぞらえ（隠喩）」によって他者関係を再構成しようとする意味行為であることを示唆している。

文献

Lahire, B., 1998=2013, 鈴木智之訳『複数の人間——行為のさまざまな原動力』法政大学出版局。

澤田唯人, 2014, 「隠喩的対話という技法——「語り得なさ」をめぐる当事者実践の社会学」『三田社会学』19号。